



David Garibaldi

デヴィッド・ガリバルディ

どんな音楽を演奏していてもうまくやれたなと思うのは
その音楽にふさわしいドラミングでありながら
自分じゃなければできない演奏ができたときなんだ



1946年11月6日、サンフランシスコの対岸に位置するオークランドで生まれ育ち、その地の名を冠した“オークランド・ファンク”という1ジャンルを確立するほどの隆盛を究めたバンド、タワー・オブ・パワーのドラマーとして君臨したデヴィッド・ガリバルディ。一時はバンドを離れるものの、98年に復帰、現在でも年間150本以上のライブをこなしているという。今回は、彼が参加したラッドの新作「メイク・エヴリー・セカンド・カウント」リリースを機に、彼の現在、そしてT.O.P.黄金時代に迫ってみたい。あの名曲の1曲スコアも掲載！

Interview : Rhythm & Drums Magazine
Interpretation & Translation : Akira Sakamoto
Special Thanks : Michael Kirsch (7 Bridges Recordings)

僕がラッドの音楽を自由に解釈しても受け入れてもらえることが多いんだ

●3年前のタワー・オブ・パワー（以下T.O.P.）復帰後、主にどんな活動をなさっていましたか？

デヴィッド・ガリバルディ(以下DG) T.O.P.は最低でも年間150回くらいコンサートをやるから、かなり忙しているんだ。僕はその他にクリニックもやっているし本も書いてるから、それだけでも、目いっぱいだよ(笑)。

●T.O.P.に復帰したときのインタビューでは、インプロヴィゼーションの部分を増やしていきたいというお話しもありましたが、ラッドの新作「メイク・エヴリー・セカンド・カウント」には、どのようなドラミングを考えていましたか？

DG ラッドのこの音楽はポップ指向だから、レコーディングではそれほどインプロヴィゼーションの余地があるわけじゃない。もちろん、ライブになれば話は別で、たっぷりインプロヴァイズすることができるけどね。

●あなたはT.O.P.のベースリスト、フランス“ロック”プレスティアとのリズム体という形で語られることも多いですが、自分ではベースのどの部分にいちばん注目していますか？

DG ロックと一緒にやる場合には、お互いのやっていることがしっかりと馴染むように気を付けているんだ。具体的にどんなことをするのか話し合うわけじゃなくて、お互いの演奏をよく聴きながら、微調整しているよ。

●ロックは16分音符を多用したラインを弾くことで

知られていますが、ああいったベース・ラインはあなたにとって合わせやすいですか？

DG 僕らはとても相性が良いし、お互いの演奏をよく聴いているから、彼のラインが細かいかどうかは、それほど重要な問題じゃない。長く一緒にやっているというのも、僕らの息が合っている理由の1つだけれど、実は初めて一緒に音を出したときから相性はぴったりだったんだよ。今と同じようにね。

●今回ラッドの新作で共演したマーク・ヴァン・ワグニンゲン (b) について語っていただけますか？

DG マークとは、僕がロサンゼルスからベイ・エリアに戻った1989年に出会ったんだ。マークと兄弟のポールと一緒にね。ポールはアンディ・ナレル(d)と仕事をしていて、マークはビート・エスコヴェード(vo/per)と仕事をしていて、ビートのバンドにはレ

RAD's New Album

「メイク・エヴリー・セカンド・カウント」



Pヴァイン PCD-23142

ボーカリストでありソング・ライターとして、ベイ・エリアを中心に伝説的なミュージシャンと共演してきたラッドの4作目。美しい旋律をさまざまなリズム・フィールに乗せるアイデアとセンスの良さ、独特のフィーリングで歌い上げ、またしっとりときさやく彼女のボーカルは、ジャンルを超えた新たな地平を創造する力も持っている。

イ・オビエド(g)もいたんだ。それはともかく、以来マークとはラッドのライブ・バンドやレコーディングで共演してきた仲なんだ。素晴らしいミュージシャンだよ。ある意味で彼はロックに近いタイプのプレイヤーで、演奏のスタイルも感覚もよく似ているから、僕にとってはとてもやりやすい相手なんだ。

●タイトル曲などは、ロックとのコンビネーションを彷彿とさせるグルーブになっていますが、あなたのメイン・グルーブは主にゴースト・ノートを含めたスネア・ドラムのパターンで出していますよね？

DG そう。それにハイハットとベース・ドラムを加えた3つの基本要素であのフィーリングを出しているけれど、質感の部分は主にスネアとハイハットで作り上げたんだ。

aldi

●3つの要素の音量バランスについては、基準的なものがありますか？

DG まず、一番音が大きいのはスネアのアクセントで、その次がベース・ドラムのアクセントなんだ。スネアやハイハットのゴースト・ノートは、スネアのアクセントとベース・ドラムのアクセントとの空間を埋めるような気持ちで叩いている。ただし、スネアとベース・ドラムのアクセントを際立たせるために、ゴースト・ノートはできるだけ小さな音で入れるようにしているよ。そうすれば、細かいリズム・パターンを叩いてもやかましくならないしね——これは僕が昔から気に入ってやっているドラミングの手法だけれど、僕の大好きなジェイムス・ブラウンのバンドのドラマーのスタイルにも通じているんだ。それが僕のルーツでもあるからね。

●「ミン&リーン」や「スーシー・アン・グレイヴ」のように、このテンポでこういったバウンス気味のグルーブを出すのは難しいと思うのですが？

DG 僕らはもともとスウィングっぽいグルーブが好きだし、ファンクを叩いてもスウィングした感じになるから、この2曲のグルーブもテンポも、僕にとってはごく自然なものだよ。もともとラッドの好みは僕のとよく似ていて、僕が彼女の音楽をかなり自由に解釈しても、受け入れてもらえることが多いんだ。ただ、ドラマーとしては、テンポがどうであれ、ハシッたりモタッたりしないようにグルーブに集中して、リラックスした演奏ができるようになることが肝心だね。そのためにはよく練習して、ニュアンスやタイミングを聴き分ける耳を養わなきゃ。



▲Left to right/レイ・オビエド(g)、デヴィッド・ガリバルディ(d)、ラッド(vo&key)、マーク・ヴァン・ワグニンゲン(b)、マイケル・スピロ(per)、ロン・スターリングス(sax&fl)

PLAYING ANALYSIS of 「Make Every Second Count」

採譜&解説：菅沼道昭

Ex-1 イントロ

Ex-2 エンディング

Ex-3 イントロ

Ex-4 A&B

Ex-5 C&D&E&F

Ex-6

Ex-7

Ex-8 CD TIME: 04:27~

Ex-9

Ex-10 CD TIME: 01:19~

スリッパ・ビート

Ride →

7 7 7 7 7 7 7 7 → H.H. simile

M2: この曲のガリバルディとベースのグルーブはT.O.Pを彷彿させるファンキー・ビートだ。Ex-1はイントロのパターンで、間を埋めるスネアのゴーストの入れ方が彼らしいグルーブのポイント。Ex-2はエンディングでのキメ&フィルで、タムの使い方がポイント。**M4**: Ex-3はイントロ〜のパターンで、スネアのゴーストでバウンス感を出している。Ex-4はAメロのパターンでHHオープンがなくなり、よりグルーヴィなパターンに。**M6**: Ex-5はオルガン・ソロに入る部分で、フィルから2拍目にスネアのアクセントがくるパターンへ展開している。**M8**: ややスウィング感のあるバウンスしたグルーブなので、同じく3/4拍子の**M4**、

M6と比較すると面白いだろう。Ex-6は基本パターンで、スネアのアクセントとHHオープンとのコンビネーションがポイントだ。サビではライドに移り、よりスウィング感を増している。**M10**: ポサノヴァ系の曲で、Ex-7は基本ビートでクローズド・リム・ショットはあくまで一定に叩いている。Ex-8はエンディングでのアプローチで、キメにクラッシュを合わせ、間をフィルで埋めている。小筋アタマをすべてスネアでキメているのがポイント。**M11**: ジャム・バンド風のインストで、Ex-9はクローズド・リム・ショットによるパターンだ。Ex-10はライドのパターンに移る部分のアプローチで、スリッパ・ビートが使われている。

DG 僕らはもともとスウィングっぽいグルーブが好きだし、ファンクを叩いてもスウィングした感じになるから、この2曲のグルーブもテンポも、僕にとってはごく自然なものだよ。もともとラッドの好みは僕のとよく似ていて、僕が彼女の音楽をかなり自由に解釈しても、受け入れてもらえることが多いんだ。ただ、ドラマーとしては、テンポがどうであれ、ハシッたりモタッたりしないようにグルーブに集中して、リラックスした演奏ができるようになることが肝心だね。そのためにはよく練習して、ニュアンスやタイミングを聴き分ける耳を養わなきゃ。

●「オン&オン」のシンプルなドラミングは、あなたのスタイルからするとちょっと珍しい演奏ですが、これはあなたの解釈ですか？ それとも彼女から具体的な指示があったのですか？

DG 両方の組み合わせだね。彼女はとても才能のあるミュージシャンで、ひとつの曲をどういうサウン

ドにしたいのか、それぞれのパートにどんな演奏をさせたいのかが、かなり具体的に見えているんだ。だから、僕らは彼女の意図をできるだけ正確に読み取るように努力するわけだけど、その一方で、彼女は僕らにそれぞれの個性を発揮してもらいたいとも思っているんだ。それで、彼女の意図と僕らの欲求とを同時に満足させるような方法を見つけるようにしているんだよ。

●先ほど、ドラミングの3つの基本要素というお話がありました。その3つの要素には入っていない「ライド・シンバル」の役割はどんなものだと考えていますか？

DG ロックやファンクみたいな音楽では、スネアとベース・ドラム、ハイハットの3つの要素で常にタイムを刻んでいるけれど、ライド・シンバルは3つの基本要素で作ったメインの部分に、少し違った質感、色彩感を加えるためのものだと思う。ところが、ジャズ